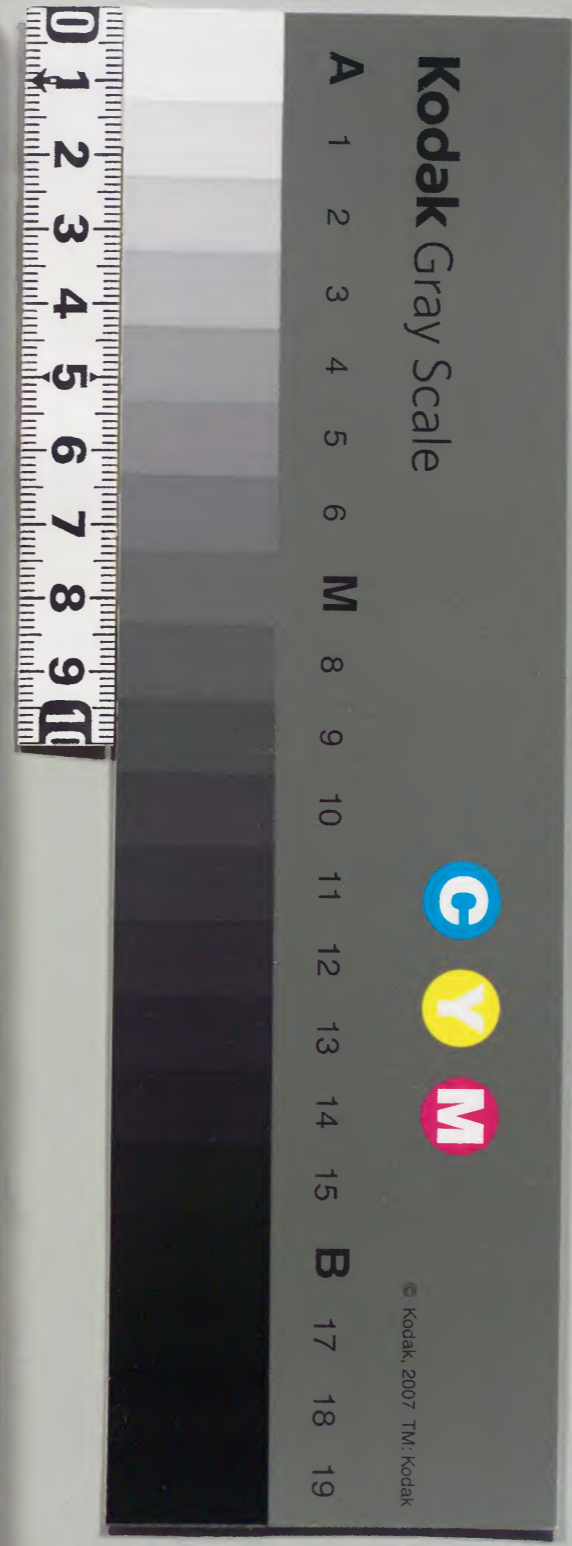


寛永諸家譜

藤原氏丙十冊之内六
秀郷流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (92)		
函號	76	1	



裏面記載のない箇所は省略





皆川

太田

寛永諸家系圖傳

藤原氏

丙六小家

秀卿流

皆川

大織冠八代

秀卿

依藤太

返四位下

武藏守

村雄乃一男母下野掾麻鳩女

天慶三年平氏將門をう川

淺草文庫

是よりして武蔵下野両國
任事

千常ちんじょう

左衛尉

浪下なみのり

浪守府將軍なみのりしゅふくわん

文脩ぶんしゅう

内舍人うちしやにん

浪下なみのり

浪守府將軍なみのりしゅふくわん

兼光かねみつ

左馬允さまたのり

陸奥守むつみのり

浪下なみのり

浪守府將軍なみのりしゅふくわん

頼行たのりゆき

浪下なみのり

浪守府將軍なみのりしゅふくわん

武行たけゆき

浪下なみのり

浪守府將軍なみのりしゅふくわん

行方ゆきかた

太田大吏おののこ

下野介しもとのすけ

行政ぎょうせい

古田別当ふるたのりやう

太田大吏

宗行むねゆきとあつて

行光ゆきみつ

曰郎いっしやう

政光まさみつ

小山曰郎こやまのいっしやう

下野大掾しもとののだいじやう

法名建西ほふなまけんさい

朝政あそ

同下野守

後五位下

法名建西

宗政むねまさ

长泥五郎ながぬいごらう

或在中泥あるかちのぬいと云ふ

後五位下

淡路守あわじのしゆ

納光

結城七郎 五位下 上将介

法名目阿

儀礼是利と同等

時宗

五位下 淡路守

政能

左衛門尉

政綱

左衛門尉

宗貞

皆川孫四郎 左衛門尉 法名建光

宗長

四郎左衛門尉

宗村ムネムラ

淡路八郎

法名覺空ツツミ

宗俊ムネトシ

淡路四郎

元名宗忠ムネタカと号す

法名宗覺ムネトシ

秀俊ヒデトシ

又四郎

宗則ムネノリ

又四郎

宗常ムネノトシ

又四郎

文明三年二月二十四日ノチ

付書

宗系 しゅうけい

之河守 このがもり

後五位下

顯宗 けんそう

之河又四郎

宗泰 しゅうたい

又四郎 左衛門尉

時村 ときむら

善室七郎 ぜんむろしちろう

秀行 しゅうぎょう

後五位下

越前權守 えちぜんごんすけ

判官 はんくわん

正平年中乃人

宗秀 しゅうしゅう

長沼淡路 ながぬまたんろ

新左衛門尉 しんざえもんゑ

觀應年中乃人 くわんおうねんちゅうのひと

宗親

駿河権守

泛ふ位下

今按ど侍り官本の系図よしの乃

席次頗お遠れ侍りまらとらど

志づくそ家傳を記し友本の

系図をうに書しそ異を

あらし

兼光

頼行

武行

行号

行政

行光

政光

朝政

宗干しゅうかん

長沼駿河守
元中げんちゅう年中の人

秀行ひでゆき
宗親しゅうしん

宗秀しゅうしゅう

時村ときむら
宗恭しゅうきょう
宗貞しゅうてい
時宗ときむね
皆川みながわ
中沼なかつま

政融せいじゆう
時宗ときむね

朝光あそみつ
宗政しゅうせい

秀直 ひでなほ

淡路守

義秀 よしひで

淡路守

應永年中の人

波光 なみてる

二郎

早世

憲秀 のりひで

童石 どういし 亀鶴丸 かめつるま 淡路守

實之義秀 じつひで 子なり

秀光 ひでてる

长沼紀伊守

暮齡九十六歳

秀宗 ひでむね

長沼淡路守 法名華屋

持氏没落のとき猛倉中比淡路

をいへ一家へひ死す向中

浪人となり此時下野國皆川を領

ふ十余郷を領 中興也

光泉 ひかり

和光院 中納言 天台宗

氏秀 うぢひで

長沼淡路守 法名竜騰

宗成 むねなり

皆川内少輔

下野國壬生よりきて戦死也

法名心月

成勝なりかつ

皆川山城守みながわのやましろ

謙余義氏けんよぎしのとき家の證文あかしがたをりんぐ
あつひ長沼と号と法名建隆けんりゅう

俊宗とよむね

皆川山城守

相氏あいらし没落の俊実とよみ東八列乃諾士やくしをり

之國乃城このくにのしろこりりひひ隣境りんぎょう也
たふ俊宗とよむね幼少わらわら殺傷ころし戰場ばりやうり
のそひと之も勝利しかりをえすと
と形かたちあつひも同必なづか要野の飯山いひやま
れあ城しろを攻せまらく依地よぢと或あるも壬午にんご
了しりうひ卯うの刻ときより亥ひのち
よとりてうらひを伏血ふくちをくく
壬午にんご乃西皆川にしみながわの東ひがしり台戰場たいばりやうとる
ゆとらあり

天正元年九月廿一日四十九歳
て死す 法名文勝 道号傑岑

廣照

山城守 老圃と号す
母を水若菜のしむめ
永禄五年武田信玄小茶氏康と
氏茂婚す
廣照十曰歳少くして甲

貴を常と十七歳乃とき父が命
をうけく兼守都交り三たび入
城を攻め心をめち父とおかしく
えらして板本の城を小山高綱を
討捕九三十歳此日自身得とこの
首級七合見廣勝死してのち家
督をけきてよりこのる身不肖
とんとも或る作竹とくひあま
小田原よりたつふと數年

とふ志れどもはあり勝利を失
りふ

天正八年中川市古志尉を奏者と
して

東照大権現乃幕下り殿一君臣
乃礼をふりて川内

同十年

大権現一供をて織田信長
戸見山信長とてに明智がころ

弒されくは遠州濱松小を
いさ甲州新府乃陣をつとむ
同十年小糸氏政兵を殺さるに
とひく志平山一城郭をつとむ
是をふせ

大権現此とき上使之人とて申川
市古志尉天野孫之内海とて等々
とてに魏城一軍をとりてのら之使
濱松一とせ之を名戦乃始終を

にげしつ川内是りしりしりしり
翌年

大権現より軍旅乃賑とて英令

之百安とてしりしりしりしり

鼓棟結城小山等此言戦りしりしり

小せどそ外乃軍回あげしりしり

海りしりしりしり

長六年正月朔日

大権現乃命よりしては口伝下りしり

そのち 作しりしりしりしり

行乃艱又とわ平中練言しりしり

母とよとそしりしりしりしり

しりしりしりしりしりしりしり

かろしり

元和九年二月より沙救免ありて

將軍家よりしりしりしりしり

けいしりしりしりしりしりしり

城門と出入り

寛永四年十二月廿二日八十歳
卒を 法名 普願寺 勝院を之徳
と号すと

隆庸たかむね

元ハ重宣 従五位下 志摩守 坂山城守

あゝい 母 中御門宣綱のちのちのすめ

享長五年

台徳院殿たいとくゐん 志しいいくく戸こ川がわ

宇都宮陣うつのみやとつとむ 此時二十歳あり
又那須大田原の城なすのをいて系勝けいしょう
つとむとあつとめ又廣照ひろあきとおむく在
陣じんとそめり

台徳院殿たいとくゐん乃沙供のさく 戸川とがわ日信ひのぶ別
去こ回くわいり 勢せいむく又大坂おほさか 従よ在ざい心
同年

台徳院殿たいとくゐん右大将みぎだいしょう 任にんじとせ給たまふとき
隆庸たかむね 従よ五位下ごご 叙ぎよし 志摩守しものまもりに任にんじ

同十年

右徳院敵涉泰 内乃刻

大指現乃為命をかりし日涉儀代の列
了くしり供養の騎馬十六人の
中に作とあれ又廣照回切あるを
くしり志しりとしも又廣照也
可しは涉劫氣をかりし日て
同十九年大坂一とひく井伊
掃部以直者より一属し

陣母あり 翌年大坂再陣乃とき

五月六日若江乃戦場よりをひく

高名も同日味方少やうしりとき

隆庸ありそい井伊直孝同家入

これと志しり

元和九年又とおろしく涉ゆり

とかりあり

將軍家よりしりしり川内

宗富 むねとみ

市 いち

成卿 なりなり

又三郎

秀隆 ひでたか

又七郎

成之 なりゆき

三太郎

家紋

二頭 ふたがしら
古 ふる
巴 くま



右房

甚田節

廿四日亥

右置

甚田節

廿四日亥

清康君了了子川内

太田

廣忠卿より下戸川向

天文十三年之別之末乃城より

としく戦死す

吉勝

是の節のら吉大丈とありし心

廿四回

十八歳乃とき

東照大権現より洋場へくつ

弘治三年

大権現参列徳川列屋より進發

ありく一日より之度より終る

吉勝先より終る終るありし

その場よりありし者も矢田作十郎

太田孫吉史ありし翌日いざ見ると

とき新屋乃城下十八町縄より

といて首級を納む

永禄十一年

大樽現遠別懸川沙奈向れとき

根小屋をやめんとし海ふ志れ

しりあし吉勝酒井と口節をのり

高岡より進みしれをやんとしふ

大樽現吉勝を御前よりめられその

らりしとを沙らりしをこれ

志らりしと海ふこれより吉勝

初めにとのび乃ものきして城戸に

ををさくし根小屋より火ををか

川敵兵これとぬせぐとありしと

元龜元年に別嬬川吉勝乃時

吉勝一日よりふしびしとみく首

み級をぬし

同之年武田信玄之方原より出陣の

とき大沢たぬ中安部が海り

水之海の遠別堀に乃城ををそ

らんを以て乃つげあり

大樽現これを書名松平之麓よりびよ

者勝を以て大沢在東の依が戸あり

堀江乃本城乃如礮より中安を二

九り居志あ終ふ十二月二十二日

信玄淡松よりせむしととき堀江の

城下を以て此とき者勝矢を

んより甲士一騎を討にす志より

とりとも敵兵ありくさくさ

若し一回二十之目三音原一戦の後

信玄瑞陣乃とき堀江乃城を以て

ふ中安外曲輪を以て二九日

てぬせましくらんとりよ者勝こ

れを以てしむるなり外曲輪

を以て兵を以てむととき敵

兵勝りの白くむるは水城

あやうゆらんを川を以て内を

かしくす

大樽現に此とて紙に石沙磨英と
る糧米ありて一り大豆木を給ふ
本田印在惠これさうけりて
天正三年冬別長瀬合戦了
供奉と川とあ首級を給へり
同年遠別小山合戦乃て
麾下了り居しこころ川
首級を給へり
同六年駿別遠目合戦乃て

供奉と川とあ又首を給へり
長十三年武別了りて
死に法名於惠

吉正

是四郎 のら吾ち史と号と
生四回前
るが是崎之節信康自よつふ
信康自沙遊去のちいま

先陣とて敗軍を向りし向く
安茂次古来のりびよ吉正あひま
にともみく繼をあたはしこよまひ
く味方乃軍勢くくあつ敵を
をふ敵兵敗走く城より
門をとらぬ

天正十二年

大指現尾列早崎乃城を征伐し
く向ふとき一回解江乃城より

安茂を早崎よりく城を征伐し
とらふとて城より一人を吉正これ
を斬削ししれを吉正これ
くその首をとらし一人を
城中よりく向らぬ

同十八年小田原陣 同十九年

奥列陣 文禄元年 羽群陣 亦

大指現より供奉也

享長五年

徳院殿 信州上田河邊殿 乃とき

詔 信州河邊殿 乃とき

州 乃とき 中山勅解 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

乃 乃とき 河邊殿 乃とき

備ぶその場をきりぞいし二人を
射倒中山己下乃三人銃をりて
敵兵ををいし引退とこあり
敵又之ーあんとこ乃ときを正矢
麻をかりゆるとりともあくと
うすしそ又二人を射倒つわ
敵ゆるりし引ちりぞ敵兵又
いささらときり鎮目市左束門
らせし見銃をあたしを正矢又

しきがー徳目りいといと
通し矢をけふとき敵とく
退敵と名正が射倒らるの前後
りち細野橋と物今冬尾川よあり
ゆりといしとこ乃ときを正軍法
とそりて

台徳院敵乃沙勒氣とくゆり
よりて其回師守りあけし
ひく者妻りしとそりて

これ止か信乃領地をいふ

同十九年大坂陣乃とき

作をかりぬり沙目竹とありて

右徳院敵り信乃

元和元年大坂陣乃とき

嚴命りしりて沙使番とあり先

陣とせせのりて二月七日首級とる

り沙陣乃のら右乃軍四より

く取信乃いふ

同二年 作ぬりて布衣を著せ

同之月沙弓と力十騎同心二十人を

あ川

寛永九年より

將軍家りて川日食邑を

く

同十年 作りて川に沙旗を

とあり

同十五年三月二日武列よ

台流

死と 法名惠順

小之郎 のち台兵束尉と号す

廿四回前

十五歳ありとす

大権現を降し〜〜川内

十八歳より病あり〜〜屏括と

次勝

宗兵束尉 廿四武苑

元和六年

台徳院殿より洋湯〜〜川内

同八年涉小將継り〜〜列

番子川とす

寛永十年 食邑より〜〜

台流

平右衛門尉 廿四回前

寛永九年

將軍家を降ししめて戸川内
同十一年食禄をこまふ

台次

十在集耐 のち若吏と号す

寛永十二年

將軍家を降ししめて戸川内

同十三年沙小姓繼りしめて入る

川とむ

同十六年父名正の遺物をたす
らむ

台次

徳右衛門尉 中園目兼

寛永三年

將軍家を降ししめて戸川内

同四年沙小姓繼りしめて列し

番を川とむ

同五年食邑をこまふ

家紋

片端車カタヘマクルマ

夕顔ユズリハ真マコトあり

正次しんじ

又十郎 廿四日亥

正勝しんしょう

太田おくだ

四郎左衛門尉 廿四日之河
廣忠卿ひろたけ 了しる 了しる 了しる

東照大権現トクノミコノミコトシ

正直マコト

加兵束尉 生國ナニクニ回前

大権現トクノミコノミコトシ

子川コカハと心

長ナガ十六年十二月トキ四十二案シノ

死シと法ホウ不フ了レ跡アト

正忠マコト

加兵束尉 生國ナニクニ山城ヤマキ

元和ゲンワ四年六月

將軍家シラノリ子孫コソノ礼レ子コ

同九年十一月トキ沙小サコ姓ナリ繼ツグ乃ノ書カキ

川カハと心

寛永八年ケンエイ正月トキ大沙オホサ書カキ

つと心

心成

又右兼門尉 中園武茂

元和二年

右徳院殿 許錫

寛永四年

將軍家

家紋 片輪車

正勝

太田

歌在忠尉

三別堀海部平田の巻

了一絶と

廣忠卿了了了了

正道

甚九郎

七國冬河

母を言ふにうらな東門宣光の女

少年より也

東照大権現よりつるつる戸つる

天正三年五月廿一日之別長藤

合戦のとき二十一歳にして討死

法名津島

清正

甚九郎

後教右衛門と号も七國

尾法

実名高木甚太郎清方の子正道が

姪なり正道より子あり也

大権現乃鉤命よりつるつる正道の家

精をつるつるつるつる川は高木

氏々事々言々高次郎が系也

Handwritten text on a vertical strip of aged paper, likely a manuscript or document fragment. The text is written in a cursive script, possibly a historical form of Japanese or Chinese calligraphy. The characters are dark and somewhat faded, and the strip shows signs of wear and discoloration.

あつし

天正十二年尾別長久手合戦

了供養を以て

同十八年相別小田原陣

供養を

慶長五年 国原陣 供養を

川と

元和五年六月十四日六十二歳

死と法名津徳

宣重

牛田邸 生田武庵

元和九年より

將軍家より之より

寛永十年二月 作と

小十人の継以と

心盛

市島東尉 牛田山城

寛永九年

將軍家よりつとくく戸川

家故 九の内よ^まるの^まり

某

太田ヲ

家内ノ

中園ノ甲斐ノ

武田ノ信玄ノ子ノ之ノ鉄炮ノ大将ノ

身ノ

昌安

純渡 土國回前 法名獨飯道本
信玄 信別川申鶴の代
官職を川を勝新没落
東照大権現 錫 月川
甲別 領地を海

信昌

之内 中園回前
勝頼 勝新没落
ておら

大権現 錫 月川
天正十八年 関東沖入園のとき
巖命 戸部城の書を
川

長五年 其田陣乃とき 信昌
信別 境を

為命をたふす

名德院へ供養せ

同六年に死す

台重

勅左衛尉生國同前

大指環

名德院殿

將軍家へ勤仕し、しつり、

寛永四年十二月廿日自死す

六十日歳

法名梅安淨室

台次

七右衛尉

生國出産

名德院殿

將軍家へつり、しつり、

台宗

九右衛尉

生國同前

吉家

將軍家リつゝく戸川家

小兵衛尉 中河内

將軍家リつゝく戸川家

吉竹

長七郎 中河内

將軍家リつゝく戸川家

吉久

勘九郎 勘左衛尉 中河内

元和九年乙未

將軍家リつゝく戸川家

寛永十二年二月三日乙未死す

歳三十一 法名心安乙未禪乙未春乙未

吉正

勘九郎 生國同安

寛永十三年在久が遺跡をつき
將軍家よりつくるくく川に

安正 やすし

又古志の尉 生國甲斐

慶長十九年より

在徳院敵よりつくるくく川に房別

りといふ御代友職をつとむのち

將軍家よりつくるくく川に御代

の管作の事といふ

寛永十八年より死を六十の歳

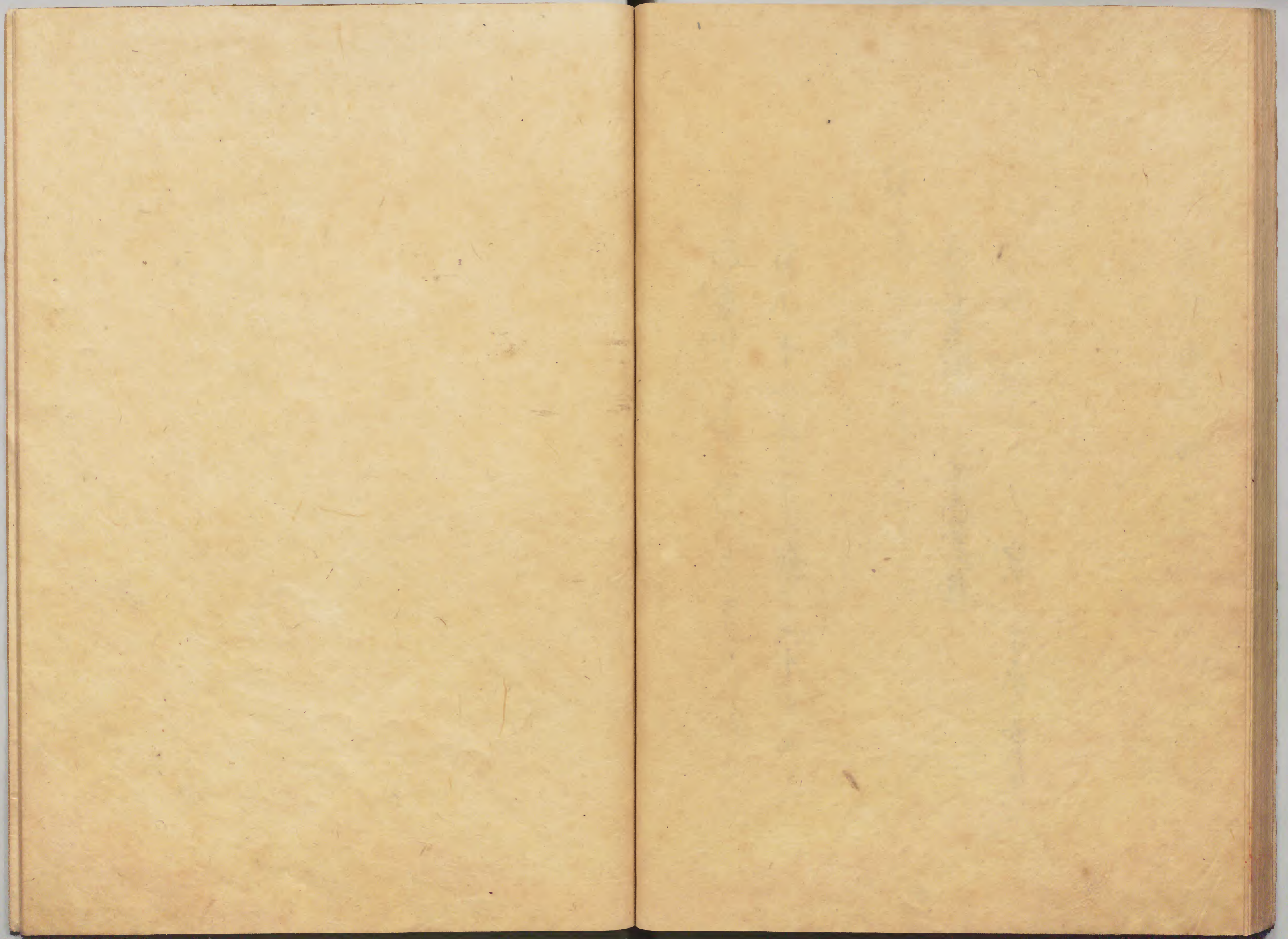
貞正 まさよし

藤古志の尉 生國武蔵

安正の養子といふ實の系系甚だあが

子あり

家紋 在巴 いらい 貞正 まさよし 在在 いらい



● 重光 しげみつ

次郎在集射

廿四式花 いさし

法名清光 きよみつ

太田 おくだ

本名之務と号と

康直 やすちか

次郎在集射

廿四式花

重吉

左兵衛尉

十四回安

東照大権現より三月三日

伏見に在る

重元

左兵衛尉

十四回安

右徳院殿より三月三日

將軍家より三月三日

康儀

兵五郎

十四回安

右徳院殿より三月三日

康重

左兵衛尉

寛永十二年

將軍家より三月三日

家
改
鎬か
矢や

俊綱とくに

足利太師

成行なりゆき

秀卿ひでゆき 成行

足利太史あしひのたし

太田おくだ

有綱ありつな

部屋戸七郎べやどのしち郎

康綱やまとつな

佐野又太郎さのまたたろう

信綱のぶつな

木村之郎きむらもの郎 左衛門尉ざえもんゑい

廣綱ひろつな

阿常あつね 小四郎せうしろう 氏部うじべ 左衛門尉ざえもんゑい

秀頼ひでより

太田おくだ 四郎しろう 母はは 八はち 山やま 塚つか 守もり 行政ぎょうせい 女にょ

此こゝ 回まわ 中なか 絶たぎ

信盛のぶかつ

新あらた 左ひだり 東あづま 門かど 法はふ 名な 光みつ 感かん

東照とうしょう 大おほ 権けん 現げん

台たい 法はふ 院いん 殿でん

将軍家しょうぐんけ 了りやう 一いつ 二に 三さん 四し 五ご 六ろく 七しち 八はち 九く 十じゅう

盛次

新左衛門

信盛が妻の子となり実を伺ふに清

信之が子なり

將軍家一つとていふは

家紋 井桁の印



